

令和4年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人山本能楽堂	
施 設 名	山本能楽堂	
助成対象活動名	公演事業	
内定額(総額)	12,144	(千円)
	公演事業	12,144 (千円)
	人材養成事業	0 (千円)
	普及啓発事業	0 (千円)

(1) 令和4年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	初心者のための 上方伝統芸能ナ イト	2022/7/16. 8/20. 9/17. 10/15. 11/5. 12/31. 2022/3/1/14	落語 桂かい枝/天王寺舞楽 天王寺楽所雅亮会/ 能 山本章弘/文楽 人形浄瑠璃文楽座/筑前琵琶 奥村旭翠/上方舞 山村友五郎/講談 旭堂 南海/浪曲 真山隼人/女道楽 内海英華 他 能演目「富士太鼓」「清経」「葛城」「翁」	目標値	770
		山本能楽堂		実績値	677 ※
2	たにまち能	2022/4/2. 12/4. 2023/1/8	○4月2日(土) 能「田村」:山本麗晃 喜多雅人 齊藤敦 飯田清一 河村凜太郎 狂言「左近三郎」:茂山忠三 郎 山口 耕道 仕舞:「賀茂」河村浩太郎 「藤戸」 杉浦豊彦能「百万」:山本章弘 福王知登 左鴻泰弘 古田知英 河村大 井上敬介	目標値	330
		山本能楽堂		実績値	380 ※
3	光と照明による 能舞台の陰翳	2022/5/7	能「鉄輪」:山本章弘 福王知登 広谷和夫 貞光智 宣 古田知英 河村大 井上敬介 島田洋海 大 西礼久 山田薫ほか	目標値	110
		山本能楽堂		実績値	85※
4	とくい能	2022/5/29. 7/23. 11/27. 2023/1/22. 2/23	5月29日(日)「鶴飼」:山本章弘 福王知登 喜多雅人 野口亮 飯田清一 河村凜太郎 井上敬介 鈴木実 梅若猶義 梅若基徳 上演演目「巻絹」「田村」「菊慈童」	目標値	660
		山本能楽堂		実績値	409 ※
5	能×文楽シリー ズ	2023/3/19	素浄瑠璃 「妹背山婦女庭訓 『花渡しの段』」:竹 本小住太夫 鶴澤寛太郎 能「高砂」:山本麗晃 笠田祐樹 福王知登 喜多雅 人 福王和幸 貞光智宣 成田奏 河村凜太郎 中田弘美 山階彌右衛門 山本章弘 大槻祐一	目標値	220
		山本能楽堂		実績値	104 ※
6	神男女狂鬼	2023/2/5	山本章弘 梅若猶義 河村浩太郎 樹下千慧 山 本麗晃 前田和子 左鴻康弘 古田知英 河村大 井上敬介 野口亮 成田奏 河村凜太郎 原大 原陸 「高砂」「清経」「井筒」「巻絹」「土蜘蛛」	目標値	110
		山本能楽堂		実績値	115
7	能からみる日本 の宗教	2022/7/3. 8/21. 12/11. 2023/2/12. 3/12	○7月3日(日)「雷電」:釈徹宗 山本章弘 福王知 登 貞光智宣 吉阪一郎 谷口正壽 前川光範 善竹隆司 梅若基徳 河村浩太郎 上演演目「三輪」「海士」「小鍛冶黒頭」「竹生島」	目標値	550
		山本能楽堂		実績値	501 ※
8	山本能楽堂企画・ 能楽特別公演(仮 称)		今年度、普及事業・人材育成事業の助成金が取れな かったのですが、山本能楽堂の任務として、負担が 大きくても事業を実施すること、新型コロナウイルス の影響を受けたこともあり、経営悪化しており、 こちらの公演は、実施を断念しました。	目標値	390
9	The spirit of the Moon~月に憑 かれたピエロと 新作能「月乃卯」	2022/9/12	新作能「月乃卯」:山本章弘 安田登 森田光次 古 田知英 守家由訓 田中達 浦田保浩 大西礼久 「月に憑かれたピエロ(シェーンベルク作曲)」:ケ ント・ナガノ 藤村実穂子 ハンブルクフィルハー モニー管弦楽団	目標値	90
		山本能楽堂		実績値	130

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価													
社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。													
 <p>Tradition for a better future — 明るい未来のために伝統芸能をつなぐ — コロナ禍だからこそ、誰もが良質な文化体験を享受できる環境をつくる 客席が減少しても、入場料の値上げは行わず、地域を文化で支える開かれた劇場を目指す</p>													
<p>山本能楽堂は「Tradition for a better future」をミッションとしてかけ、大阪ならではの地域の特性を活かし、「伝統をより良い未来社会に活かす」べく事業を実施している。令和3年度も、新型コロナウイルスによる被害拡大防止のため、当初の予定通りに事業を実施することができなかったが、そのような事態においても「誰もが良質な文化体験を享受できる環境をつくる」をモットーとして、感染症拡大防止対策をおこない客席数が減少しても、入場料の値上げは行わず、コロナ禍で疲弊した地域を文化で支えるべく、開かれた能楽堂を目指し、「文化の灯を消さない」ことを第1目的として事業を行った。</p> <p>山本能楽堂は、大阪市を中心部の官庁街にあり、太閤秀吉が作った当時の町割りのままである大阪城の武家屋敷地区に位置し、100年近く能の普及と継承を行ってきた文化施設である。大阪は、秀吉が能の魅力に傾倒し、「見るだけ」でなく「自ら能を舞う楽しみ」を見出して以来、「嗜む文化」が形成され、その後、文楽、上方歌舞伎、落語、講談、浪曲など、多彩な上方伝統芸能が生まれ、育まれた「文化集積都市＝芸能の都」である。その特性を活かし、「芸能の都」として多面的・多角的に能を中心として、文楽、歌舞伎、上方舞、落語、講談、浪曲等の大阪で伝えられ、育まれてきた上方伝統芸能全体の、魅力の創出、情報発信による普及・啓発をおこない、コロナ禍においてこそ、市民によって守られ、「人の手から手へと」伝え続けられてきた伝統芸能が、社会における役割を再確認し、その魅力を再構築し、以下の事業を実施し、伝統芸能が社会に果たすべき役割を追求し、事業を実施することができた。</p> <table border="0"><tr><td>①ユネスコ世界無形遺産の能楽の継承</td><td>(13事業 27公演 実施)</td></tr><tr><td>②時代に生きる芸術創造の場</td><td>(7事業 13公演 実施)</td></tr><tr><td>③「芸能の都・大阪」としての魅力発信</td><td>(3事業 8公演 実施)</td></tr><tr><td>④豊かな文化芸術による人材育成・教育の場</td><td>(4事業 12公演 実施)</td></tr><tr><td>⑤国際文化交流・相互理解の推進</td><td>(2事業 5公演 4講座、1展覧会 実施)</td></tr><tr><td>⑥文化芸術の多様な価値の創出（社会包摂）</td><td>(3事業 1公演 実施)</td></tr></table>		①ユネスコ世界無形遺産の能楽の継承	(13事業 27公演 実施)	②時代に生きる芸術創造の場	(7事業 13公演 実施)	③「芸能の都・大阪」としての魅力発信	(3事業 8公演 実施)	④豊かな文化芸術による人材育成・教育の場	(4事業 12公演 実施)	⑤国際文化交流・相互理解の推進	(2事業 5公演 4講座、1展覧会 実施)	⑥文化芸術の多様な価値の創出（社会包摂）	(3事業 1公演 実施)
①ユネスコ世界無形遺産の能楽の継承	(13事業 27公演 実施)												
②時代に生きる芸術創造の場	(7事業 13公演 実施)												
③「芸能の都・大阪」としての魅力発信	(3事業 8公演 実施)												
④豊かな文化芸術による人材育成・教育の場	(4事業 12公演 実施)												
⑤国際文化交流・相互理解の推進	(2事業 5公演 4講座、1展覧会 実施)												
⑥文化芸術の多様な価値の創出（社会包摂）	(3事業 1公演 実施)												
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。													
<p>コロナ禍において「文化の灯を消さない」ために、助成を受けたことで、感染症被害拡大防止につとめながら、できる限り事業を継続して実施することができた。しかしながら、通常の約50%程度の客席数にせざるをえない状態が続き、興行収入は大幅に落ち込んだが、削減できる経費をできる限り圧縮するなどして、何とか活動を継続して行うことができた。</p> <p>・文化的意義：地域の文化遺産である上方伝統芸能の文化拠点として、多彩な演者と連携し、ネットワークを構築し公演を継続して実施することで、情報発信を行い、上方伝統芸能の振興と継承につなげることができた。</p> <p>・社会的意義：敷居が高いと敬遠されがちな伝統芸能を、現代人にも魅力的な切り口や方法で伝えることで、鑑賞者やファン層の裾野を広げ、地域住民の鑑賞活動の拡大に資することができた。同時に、演者同士の連携を育み、上方伝統芸能全体の活性化につなげ、創造活動の幅を広げることができた。活動を継続して実施することで、上方伝統芸能の周知につながり、他団体との連携が生まれ、「面」としての地域活性化につなげ、地域住民のシビックプライドを構築することができた。</p> <p>・経済的意義：上方伝統芸能を国内外の観光集客にも活かすことで、地域の発展を支え地域の活性化を行うことを目的に活動を行っているが、コロナ禍が続く中、人の移動が活発に行われず、大きな経済的意義を見出すことができなかった。</p>													

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

下記の目標を指標としてかかげ、今年度の事業を実施した。コロナ禍も3年目となり、先が見えない中、その時にできることをできる限り実施するという姿勢で、事業に取り組んだ。大阪では、夜の文化的なイベントが少ないとされナイトカルチャーの発掘に、当財団も注力してきたが、外出自粛要請が多く企業の企業で自主的に行われ、特に夜の外出は控える社会的な傾向が強かったため、これまで夜に行っていた公演は昼公演の時間帯に変更を行うなど、これまでとは違う新たな観客の開拓を目指し事業を行った。その一方で、世界的な指揮者であるケント・ナガノ氏とコラボレーション公演を行うことができたが、逆に本事業は、コロナ禍であるからこそ実現できた事業でもあった。また、コロナ禍の状況で文化が社会のために何ができるかを訴求し、新たに宗教学者の釈徹宗氏と「能から見た日本の宗教」の事業を開始し、能の魅力を宗教的観点から再構築し、事業に落とし込むことで、多くの方からご好評を頂くことができ、コロナ禍後の新たな活動の1つとすることができた。

【令和4年度の事業の目標】

- ① コロナ禍においてこそその伝統芸能が社会に果たすべき責務の再構築
- ② ユネスコ世界無形遺産の能楽の継承
- ③ 「芸能の都・大阪」の魅力発信
- ④ 時代に生きる芸術創造の場としての活動
- ⑤ 豊かな文化芸術による人材育成・教育
- ⑥ 文化芸術の多様な価値の創出（社会包摂）
- ⑦ 国際交流・国際相互理解の推進

【令和4年度の事業の目標の達成について】

- ① コロナ禍においてこそその伝統芸能が社会に果たすべき責務の再構築
→コロナ禍においても、事業を即座に中止するのではなく、できる限り継続して事業を実施することで、伝統芸能の力で疲弊する人々の心に、希望や前に向かう気持ちを持って頂けるよう取り組むことができた。
- ② ユネスコ世界無形遺産の能楽の継承
→事業を継続して実施することで、能楽師が継続して舞台に立つ環境を作り、稽古や演能の分断を回避した。
- ③ 「芸能の都・大阪」の魅力発信
→コロナ禍においても、継続して事業を実施し「芸能の都・大阪」の魅力を発信し続けた。毎年恒例の大晦日の年越し公演も、公共交通機関は運行を中止したが、観客の要望に応じて実施することができた。
- ④ 時代に生きる芸術創造の場としての活動
→世界的な指揮者・ケントナガノ氏とのコラボレーション公演を実施。これまでにない新たな芸術の魅力の創出を行うことができ、主要5紙にも掲載されるなど、社会的に大きな反響を頂くことができた。
- ⑤ 豊かな文化芸術による人材育成・教育
→初心者も楽しむことが出来るよう工夫を凝らした公演や体験講座を数多く実施することができた。
- ⑥ 文化芸術の多様な価値の創出（社会包摂）
→伝統芸能の世界ではまだまだ数の少ない女性の演者を取りあげ、大阪女性活躍月間と連動し事業を実施した。
- ⑦ 国際交流・国際相互理解の推進
→コロナ禍後、6月に初めてシビウ国際演劇祭から招へいを受け、オープニングで能を披露する等大きな反響を呼んだ。11月には大阪市ミラノ市姉妹都市提携40周年記念のミラノ能楽公演を実施し、この公演をきっかけに国立ミラノ大学に能を学ぶ新たなコースが新設されるなど大きな成果を上げることができた。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

令4年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの被害拡大防止につとめながらの事業実施となったため、事業計画を立て準備をしても、状況によって中止・延期を余儀なくされることがあり、常に中止のリスクを考えながら事業を行う1年となった。

しかしながら、感染拡大防止につとめながらも「文化の灯を消さない」ことをミッションとして事業を行ったため、回数は減少しつつも、概ね大部分の公演を工夫しながら計画通りに行うことができた。

世界的な指揮者であるケントナガノ氏とのコラボレーション公演は、ケント氏を含む関係者とロンドン、パリ、ロサンゼルス、ハンブルク、ワシントン、ソフィア、大阪など、世界をオンラインでつなぎながら共同で制作を行い、コロナ禍で対面で会うことができない中、制作をすすめ、公演の実現に取り組んだ。



アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

コロナ禍も3年目となったが、「文化の灯を消さない」ことをミッションに掲げ、感染防止対策につとめながら、できる限り工夫を凝らし、公演を継続して実施した。公演の規模や準備の段階で、やむをえず中止せざるを得ない事業もあり、公演事業、普及啓発事業ともに、当初の事業費より少ない事業費となった。また、通常は能の地謡はこれまで8名で行うことが多かったが、演者同士のソーシャルディスタンスの確保のため、4~5名に減らすなど、出演者の数を当初より大幅に減少する等の措置をとったため、事業費が減少した。

また、事業を継続して実施することを第一の目標とし、できる限り事業を実施したため、参加者数はコロナ禍前よりも大幅に減少し、アウトプットに対し、1人当たりの事業費が大幅に増加することになった。今後、「ウィズコロナ時代」の事業の在り方を模索し、新たな事業の実施方法を考える時期にさしかかっていると考えるが、能をはじめとする伝統芸能は、出演者の数を減らして上演することはできないため、今後大きな課題になっていくと考えられる。

全体として、事業費を当初の計画通りになるよう、様々な工夫をこらし、事業を実施することを試みたが、当初の計画通りにはなかなか進まなかった。



(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮するため、時代の要望にあわせ、新たな企画を立ち上げ、文化芸術の創造につながるよう今年度も取り組むことができた。特に、ケント・ナガノ氏と共同で制作をおこなった「Spirit of the Moon～新作能「月乃卯」公演は、ケントナガノ氏と山本章弘が協働で新作能「月乃卯」を制作し、ハンブルク交響楽団の演奏（指揮：ケント氏）により、藤村実穂子氏がシェーンベルクの「月に憑かれたピエロ」を歌う、他では見ることのできない、世界的な文化交流による、新たな芸術創造の機会とすることができた。

また、当能楽堂は、大阪に伝わる伝統芸能の普及・啓発、情報発信に特化した文化拠点として、能をベースにしながらも、大阪で育まれた文楽、上方舞、落語、講談、浪曲等の上方伝統芸能全般の活性化を行うことで、「開かれた能楽堂」として、上方伝統芸能に携わる演者同士のネットワークを作り、当能楽堂から新たな芸術創造が生まれる役割を担ってきた。今年度もコロナ禍において、ジャンルの違う演者同士の交流の中で、様々な情報を共有し合い、お互いに勇気づける関係が構築され、さらにネットワークが強化された。また、特に9月の公演は、大阪女性活躍月間とタイアップし、女性の演者ばかりで公演を行い、社会的に大きな意味を持ち、今後も継続していくことになった。

◆公演事業について

- ①大阪で親しまれ、育まれてきた上方伝統芸能の多彩なジャンルの演目をショーケース的に、オムニバス上演する公演を16年以上継続して行っているが、大阪に根差した伝統芸能の文化拠点として、大阪でしかできない公演をコロナ禍においても実施し、文化の力で地域の活性化をおこなうことができた。
- ②新たに立ち上げた「能から見た日本の宗教」公演では、宗教学者の釈徹宗氏を迎え、能の中の宗教性に着目し、コロナ禍で疲弊する人々の心に、700年近く連綿とつないできた能の魅力を再構築して届け、未来への活力を感じて頂くよう取組んだ。
- ③「神男女狂鬼」公演は、ダムタイプの藤本隆行氏のLED照明演出により、能が五番立ての演能形式で、能が本来屋外で公演が行われていたことを考察し、「現代に生きる魅力的な芸能」としての能の新たな可能性を追求する事業であるが、「字幕」や舞台転換に工夫を凝らし、事業を実施することができた。
- ④「能×文楽シリーズ」の公演では、「古い木も若みどり」という副題をつけ、ともにユネスコ世界無形遺産で日本を代表する伝統芸能である能と文楽の世界に生きる若手の演者にも焦点をあて、事業を実施した。



自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

◆大阪は「やってみなはれ」の気風が根付いた土地である。官より民の力が歴史的にも強く、チャレンジする精神が育まれてきた。当財団は、大都会の大阪の中の小さな能楽堂であるが、行政や民間、市民との連携を深め、幅広いネットワークを構築することで、世界に向けて、大阪の魅力を発信し、シビックプライドの構築や地域への愛着につなげ、地域の文化芸術の発展につながるよう取り組んでいる。

・令和4年4月20日 読売新聞 SDGs 未来へ約束（編集委員 坂成美保氏）

日本の伝統演劇で、室町時代から650年の歴史を持つ能楽。山本能楽堂（大阪府中央区）は、時代を超えて継承されてきた能楽の「伝える力」を環境保全に役立てようと、水の浄化や森の豊かさを題材にした新作能の制作・上演に取り組んでいる。持続可能な未来に向けた伝統芸能の発信力が注目されている。以下省略。

・令和4年11月7日 読売新聞「伝統文化 能楽」講評（編集委員 坂成美保氏）

（前略）釈学長は、さらに能鑑賞の意義にも触れる。「亡くなった人への思いは、古代も現代も変わっていない。能を見ることは、亡くなった人に心を伸ばしてコミュニケーションすること。人間が人間たるゆえんを探ることです」。死者の魂との交信。それは時空を超えた精神の旅でもある。三軒（5.4メートル）四方の能舞台から、広がる宇宙は果てしない。

・令和4年9月26日 読売新聞「伝統芸」講評（編集委員 坂成美保氏）

（前略）能からクラシック、クラシックから再び能へ、舞台が進行する様子をナガノは「オーガニック（有機的）」と評した。「月」という共通のモチーフが、自然で有機的な結びつきを生み、能の音楽性と歌曲の演劇性を、深く認識させる。「リボン（生まれ変わり）を繰り返し、芸術は後世に受け継がれ、伝統になっていく。そうでなければ、文化は死んでしまう」（以下省略）

・令和4年9月30日 日経新聞「文化の嵐」講評（編集委員 山本紗世氏）

（前略）シュプレヒシュティンメは西洋音楽では先鋭的な歌い方だ。だが、能と続けさまに演奏すると、芝居がかった大仰さを取り除いた自然な表現にも聞こえる。「シャーンベルクと能の謡には調和がある。能を介してシェーンベルクが21世紀によみがえったようだ」以下省略

・令和4年11月「音楽の友」講評（池田 卓夫）

（前略）筆者は大阪の公演を観たが、能楽堂のデッドな音響が能楽師の語る古文の日本語、藤村がキリリとさばくドイツ語のシュプレヒシュティンメを逆にしっかりと結びつけ、60分ノンストップの幻想体験を盛り上げた。終演度のトークでナガノは「二つの偉大な伝統—どちらも大変に純粋なものですが、歴史や文化が展開するたび、絶えず新しい発見を得て生まれ変わってきました。私と山本さんのコラボレーションは、いっさいの妥協を排し、能は能、シェーンベルクはシェーンベルクとしての文脈をしっかりと踏まえつつ、異なる角度からの刺激を与え、21世紀の生き残りを目指したのです。結果、素晴らしい発見がありました」以下省略。

・令和5年1月20日 読売新聞 社会面

ヨーロッパ有数の総合大学として知られるイタリア・ミラノ大学に能楽を学ぶ講座が新設された。日本の文学や文化を海外で学ぶ機会は増えたが、古典芸能となるとあまり例がない。昨秋には能楽師らが現地で指導しており、伝統文化の魅力を世界に広める機会と期待されている。

・令和5年3月17日 産経新聞「偏西風」（大阪文化特別記者・亀岡典子）

ミラノ大学、能楽の講座新設（中略）授業を担当する同大学のロッセラ・メネガッツオ准教授は「ワークショップは学生達にとって貴重な経験だった」と語り、（中略）私達の日本文化や美意識の知識を豊かにしてくれ、固有の文化について熟考する新しいきっかけを与えてくれた」以下省略。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

コロナ禍のため、昨年度に引き続き、今年度も当初計画していた通りの事業を行うことができなかったがポストコロナを見据え、様々な期間や団体との連携を深め、持続的な発展に向かう公演を実施することができた。

(事業運営について)

演劇の企画・制作の熟練者や文化財団、規模の大きなホールの運営経験者をスタッフに迎え組織を構築・強化し、定例会議を実施し、PDCA サイクルを回すことで、機能強化され、運営が飛躍的に改善した。さらに銀行勤務を経験者を経理に迎え、外部監査の的確な指導を受けることで、組織が継続的に改善し、機能が強化された。さらに、職員が、文化庁や、芸術団体、商工会議所、NPO団体等が主催のセミナーや講習会、研修会ならびに勉強会に積極的に参加することで、組織内部でのキャリアパスに取り組んでいる。

(演者・芸術家ならびに劇場・音楽堂間のネットワークの形成)

伝統芸能はもとより、西洋音楽、コンテンポラリーダンス、ブレイクダンス、人形劇、現代美術家、茶道家、華道家など幅広い舞台芸術関係者との人的ネットワークを構築し、常に意見交換や情報共有をおこなうことで、新しい芸術創造の可能性を追求している。

(教育機関とのネットワークの形成)

事業を実施することで、活動が認められ、京都造形芸術大学、相愛大学、神戸女学院大学等と連携し、学生達がフィールドワークに訪れ、公演に参加する等ネットワークを形成している。また、関西大学の能楽部を指導し、後継者の育成につとめている。大阪市内の小学校、高等学校の生徒の授業ならびにキャリア教育等を受け入れている。

(経営戦略について)

年間を通じて後援会の入会の勧誘ならびに寄付者・支援者への依頼、他の助成金への申請を継続的に実施し、安定的な収益基盤をつくり財源確保できるよう取り組んでいる。事業を行い、活動に参加していただくことで、支援者への理解と、新規支援者の獲得につなげられるよう努力している。財政状況は厳しい状況が続くが、支援者の数は増加している。

(海外との連携/将来の戦略)

当財団は、2011年より海外公演を開始し、これまでに、8か国、17都市で49公演を実施してきた。2016年からは、ヨーロッパ最大規模のルーマニアのシビウ国際演劇祭から毎年連続で招へいを受け、強いネットワークを築き、コロナ禍でもオンライン配信で参加し、今年度は渡航が可能となつてすぐに渡欧し、演劇祭に参加し、疲弊するヨーロッパの人々に日本文化の魅力を伝えた。これまでに培った現地との太いパイプにより、令和5年度には、東欧を代表する演出家・プルカレーテ氏の演出による演劇祭の看板作品である「ファウスト」から着想し、新しい能の作品「ファウスト」を制作し、シビウで招宴する予定である。

欧州文化首都とも2013年にコシツェで参加して以来、2019プロブディフ（ブルガリア）、2022年ティミショアラ（ルーマニア）に参加し連携を深めているが、2023年にもティミショアラに参加予定である。

また、2022年11月に大阪市ミラノ市姉妹都市提携40周年記念能楽公演を実施し、この公演がきっかけに、国立ミラノ大学に能を学ぶコースが新設されたが、今後も連携を行い、ヨーロッパでの更なる日本文化への普及につなげていきたい。

世界的な指揮者・ケント氏とのコラボレーション公演である「Spirit of the Moon」公演も、機会があれば、ヨーロッパで再演を行い、能の静謐な世界を、世界の人々に知り、楽しんで頂くことができればと、願っている。